巻　頭　言

キンメダイ栽培漁業の実現に向けて

キンメダイ漁業は伊豆地域を代表するの重要な漁業の一つですが、近年の水揚量は減少傾向にあります。水揚量が減少する以前から、漁業者は休漁日の設定や針数の制限等によるキンメダイの資源管理を行っていますが、資源回復に向けて更なる取組みが必要とされています。その取組みの一つがキンメダイの栽培漁業の実現です。

本県では古くから栽培漁業の技術開発が進められ、マダイやヒラメ、アワビ等の重要水産物については、伊豆地域をはじめ県内各地で種苗放流が行われ、資源回復に貢献してきました。キンメダイについても昭和 40 年に当研究所の伊東分場で人工孵化に成功しており、孵化仔魚の 10 日までの飼育記録が残っていますが、当時はそれ以上の進展はありませんでした。全国でも、キンメダイの種苗生産研究が行われましたが、種苗放流に至るような成功事例は現在までありません。

しかし、近年の資源状況の悪化と漁業者からの強い要望を背景に、本県ではキンメダイを第 7 次栽培漁業基本計画の新規対象魚種に採用し、種苗生産研究を再開しました。研究の第一段階として、まずは親魚の飼育方法を検討するために、平成 27 年から稲取地域の漁業者の船を傭船し、伊豆東岸沖の漁場で捕獲したキンメダイを用いて、海洋深層水を使った飼育試験を行っています。現在までの最長飼育記録は 1023 日と、3 年近くの飼育に成功しています。また、平成 28 年には産卵期である 7～9 月に、同漁場で捕獲した個体から採卵、採精し、人工授精を実施し、孵化仔魚を得ることもできました。得られた孵化仔魚の飼育期間は最長で 18 日間で、かつての 10 日間を超えることができました。しかし、平成 29、30 年は、産卵期に頻発した台風の影響で出漁できなかったり、出漁しても潮の流れやサメ、バラムツ等の食害の影響で漁模様が悪かったり、思うように親魚の捕獲ができませんでした。そこで、平成 30 年からは従来の傭船に加えて、他の漁場で操業する漁業者から魚を購入する等、親魚確保に向けて伊豆地域で協力の輪が広がりつつあります。また、当研究所でも人工的に魚を成熟させる技術や、得られた精子を長期間保存する技術等、人工授精の機会を増やすための新しい技術開発を行っています。

キンメダイ栽培漁業の実現による資源状況の回復を目指し、今後も種苗生産技術の開発を精力的に進めていきますので、引続き皆様のご協力を何卒お願いいたします。

（永倉靖大）